

教育方針	地域社会と一体となって、校訓「克己」を基に、社会の形成者としての自覚を持たせ、生徒一人一人の能力・適性・進路に応じた指導とその実現に努め、心身ともに健康でたくましく生きる人間の育成を期す。	重点目標	1 元気に学校生活に取り組み、生き生きと輝く生徒を育てる。 2 より高い確かな学力を身に付けさせ、自己教育力を育てる。 3 規範意識・自己統制力・共生の心・対人関係能力を育てる。 4 希望進路を実現させるとともに、勤労観・職業観を育てる。 5 たくましい体力を身に付け、心身ともに健康な生徒を育てる。
------	--	------	--

領域	評価項目	具体的目標	評価	目標の達成状況	次年度の改善方針
学校経営	魅力と活力ある教育活動の推進	生徒が生き生きと活動し、学校生活に充実感を持つことができる学校づくりを目指す。 「起業家教育プログラム」を始めとする独自の魅力的な諸活動において、外部人材を積極的に活用し、人材育成を目指した魅力ある教育活動を推進する。	A	学校生活に充実感を抱いている生徒は92%であり、コロナ禍の影響があったものの、ほとんどの生徒が充実感を持って学校生活を送っていたようである。「起業家教育プログラム」における外部人材の活用をオンライン型と対面型の授業を組み合わせる工夫により、魅力ある教育活動を実践することができた。	今後ともより一層、生徒一人一人に目を配り、生徒たちが目的を持って学校生活を送ることができるように教員間で情報共有を図りながら、学年団を中心に適切な支援を行う体制を整える。 教育活動の更なる魅力を回り、地域と協働しながら生徒の主体的な活動となるよう支援する。
	人間としての在り方生き方を考える教育の充実	ホームルーム活動の時間に、年3回は人間としての在り方生き方を考える時間(道徳教育)を設け、学校生活における様々な場面での指導の充実に取り組む。	A	ホームルーム活動の年間指導計画に道徳教育を位置付けて各学期に1回実施した。全校集会や学校行事を通し、豊かな心を育てるとともに規範意識の高揚を図った。 公開授業時には人権・同和教育に関するホームルーム活動を保護者や地域の方々に参観していただき、参観後には御意見や感想をお聞きすることで、今後の取組について検討することができるよう工夫した。	道徳教育の全体計画を踏まえて、全教員が、各教科や特別活動の諸活動において、生徒の自尊感情を育み、自己有用感を高めることができる取組を実施する。 人権問題に関するホームルーム活動により多くの方々に参観していただき、意見交換できる場面を作れるように今後とも取り組む。
	開かれた学校づくり	年間10日程度の教育活動公開日を設定するとともに、参加者数の増加を図る。 生徒たちの学校生活の様子をホームページに毎日掲載するなど、積極的な情報発信に努める。	B	84%の保護者に学校の様子が積極的に発信されていると評価されている。運動会は無観客で実施したが、授業公開は4日間、文化祭は公開実施した。学校のホームページをほぼ毎日更新するなど、多くの保護者や地域の方々に本校の教育活動を知っていただける積極的な情報発信に努めた。 地域みらい留学等に参加し、県外の中学生、保護者にも本校のことを知っていただける機会を設けた。	本校の教育活動を、県外も含め多くの中学生、保護者に知っていただけるように校内外での生徒の活動や発表を積極的に発信していく。

※評価は5段階(A:十分な成果があった B:かなりの成果があった C:一応の成果があった D:あまり成果がなかった E:成果がなかった)とする。

領域	評価項目	具体的目標	評価	目標の達成状況	次年度の改善方針
学校経営	地域との結び付きを大切にしたい魅力ある教育の推進	地域住民との交流や幼・小・中学校等との交流学習を積極的に進め、豊かな人間性を育む。 教科「探究」や起業家教育プログラムを中心に、地域を担う人材の育成に努める。	A	「地域と保護者との連携・協力」の項目について、81%の保護者、90%の生徒から高い評価を得ている。生徒がコスモスの苗を育ててお年寄りに配ったり、自治会連絡協議会等で学校の取組を発表したりするなど、「起業家教育プログラム」における活動において積極的に地域と関わり、教科「探究」におけるプロジェクト学習を通して、地域の課題を発見し、課題解決の意欲・関心を高めた。	地域や幼・小・中学校と連携した、交流、奉仕、防災等の活動の充実は今後も努める。 外部講師を積極的に活用し、様々な人々との出会いを提供するとともに、普段の授業では学ぶことができない体験活動のより一層の充実を図る。
学習指導	家庭学習の充実	生徒が主体的に家庭学習に取り組み、毎日平均して3時間以上の学習時間を確保できるよう、各教科における指導法の工夫・改善、ICT機器の効果的な活用に取り組む。 A: 180分以上 B: 179~150分 C: 149~120分 D: 119~90分 E: 89分以下	C	家庭学習時間が1学期平日が約132分、2学期平日が約109分、3学期平日が約148分で、昨年度の比較すると1・2学期は大幅に減少した。3学期は少し持ち直したが、目標の3時間には届かなかった。 23%の生徒が家庭での学習習慣が身に付いていないと自己分析している。 ICT機器の活用では全教員が自己研修を行ったり、遠隔授業の研修を受講したりするとともに、ICT機器活用の頻度や技術の向上が図られた。	引き続き、各教科で計画的に課題を与えるとともに、その評価・点検を徹底していく。家庭での学習につながる授業の展開及び自主的な学習・復習が習慣化するような指導を今後とも継続していきたい。 また、今年度より、生徒一人に1台のタブレットが貸与されているので、効果的なICT機器の活用を目指して、技術・技能の習得ができるよう今後も研修に取り組んでいきたい。
	教科指導の充実	ICT機器を積極的に活用し、生徒のやる気を引き出す指導の充実を図り、85%以上の生徒が「分かる授業」であると実感できるよう、授業評価の充実を図り、工夫・改善に取り組む。 A: 85%以上 B: 84~70% C: 69~55% D: 54~40% E: 39%以下 習熟度別学習や個別指導を徹底するなど、一人一人を大切にしたいきめ細かな教科指導の実践に取り組む。	A	96%の生徒、90%の保護者が「分かる授業となるよう先生が工夫・改善をしている」と評価した。公開授業で参観していただいた100%の保護者の方からは「授業の工夫や改善に取り組んでいる」との評価を得た。 授業におけるICT機器の活用や一人1台端末の活用の授業での活用は、教員間で差があるものの少しずつ活用ができてきている。 100%の生徒、94%の保護者が「一人一人を大切にしたい授業が実施されている」とし、98%の生徒、94%の保護者が「先生は個別指導も熱心に取り組んでいる」としており、高い評価を維持している。	授業アンケートの「やる気を引き出す授業でよかったか」という集計結果と合わせて分析すると、おおむね良好であると思われるが、まだ課題はある。各教科においてそれぞれの課題をしっかりと確認・分析し、指導方法や教材の研究に努めるなど今後とも改善に取り組む。また、ICT機器の効果的な活用方法について、今後とも研修に取り組んでいきたい。

※評価は5段階(A:十分な成果があった B:かなりの成果があった C:一応の成果があった D:あまり成果がなかった E:成果がなかった)とする。

領域	評価項目	具体的目標	評価	目標の達成状況	次年度の改善方針
学習活動	言語活動の充実	教科指導や教科外指導を通じて、生徒が主体的・協働的に学び、思考力や判断力、表現力等を身に付けるよう取り組む。	A	各種行事の実施後に感想をレポートにまとめたり、報告会でまとめた内容を発表したりするなど、言語活動の充実を図ることができている。「オダダン」や「TODAKO STUDY KISSA」等においてアクティブラーニングの推進に努めており、多くの生徒が主体性や積極性、思考力や表現力を身に付けることができてきていると考える。	全ての教員が共通理解の下、地域の方や企業の方との協働的な活動も積極的に取り入れながら、様々な教育活動の機会を捉えて、個々の生徒の生きる力の育成につなげ、これからも言語活動の充実を図る。
生徒指導	基本的生活習慣の確立	基本的生活習慣を確立させるために家庭との連携を深め、安易な遅刻・欠席を防ぐとともに、生徒に対する細やかな指導や校内における教育相談体制の充実を努め、一年間の皆勤率60%以上を目指す。 A: 60%以上 B: 50~50% C: 49~40% D: 39~30% E: 29%以下	B	皆勤率に関しては、60%以上の達成はできなかった。基本的生活習慣の確立が難しい生徒も一部おり、また精神的な不安感から登校が難しい生徒も存在した。教育相談に関して教職員が連携し、生徒の話をよく体制整備は達成できたと感じる。	家庭との連携をより一層密にし、生徒の基本的生活習慣の確立に努め、皆勤率60%以上の達成を目指したい。また今年度以上に教育相談体制を充実させ、生徒の学校生活を充実したものにしよう努めたい。
	特別活動の充実	学校・家庭での生活全般において、自律的・積極的な生き方を身に付けるため、規範意識の向上に努め、学校や社会のルールやマナーを遵守し、自己管理ができるさわやかな生徒を育てる。	B	規範意識を高めるために、学校や社会のルールを知ることから始まり、実行できる人材の育成のために教職員一丸となって取り組んだが、一部ルールの遵守やマナーに問題を感じる生徒が見られた。	次年度も細やかな指導を継続し、自己管理のできるさわやかな生徒を育成し、小田分校を盛り上げていく機運を醸成していきたい。
	健康・安全指導の徹底	健康・安全・防災等についての講話や教室、指導、実習等を年間30回以上実施し、生徒が自立的に安心・安全な生活できる能力や資質を培う。 A: 30回以上 B: 29~20回 C: 19~10回 D: 9~1回 E: 0回	B	健康・安全・防災等に関しては、ホームルーム活動、教科、そして学校行事等で、具体的に学習できた。特に訓練や実習という事態を想定したものに於いては、より一層の意識改革や向上心を持った取り組みができていた。	次年度も様々な場面において、実践的な取組ができるよう工夫を重ねていきたい。その際には、新型コロナウイルス感染症の状況が許せば、地域、関係機関との連携を積極的に行っていく。

※評価は5段階(A:十分な成果があった B:かなりの成果があった C:一応の成果があった D:あまり成果がなかった E:成果がなかった)とする。

領域	評価項目	具体的目標	評価	目標の達成状況	次年度の改善方針
生徒指導	健康・安全指導の徹底	交通事故0件を目標に安全指導の徹底を図り、交通ルールの遵守、マナーの向上に努めるとともに、自他の命を大切にできる生徒を育成する。 A: 0件 B: 1件 C: 2件 D: 3件 E: 4件以上	A	今年度の交通事故件数は0件であった。今年度は原付通学生、自転車通学生も少ない影響もあるが、生徒全員で意識的に取り組んだ結果だと思える。バス通学生もマナーよく町営バスの利用ができていた。	次年度は自転車通学生が増加する見込みであるが、今年度同様、様々な場面において交通安全の意識を高め、マナー向上に努めていきたい。
進路指導	キャリア教育の充実	職場見学やインターンシップ、講演会、ガイダンス、学年指導等のキャリア教育を通じて、望ましい勤労観・職業観を育成するとともに、進路意識の高揚を図る。さらに、各種活動において各自の目標と振り返りができるように、キャリアパスポートの充実を図る。また、生徒や保護者に対して、ホームページを活用した情報発信にも努める。	B	職場見学やインターンシップの外部研修、外部講師を招いての面接指導やガイダンス、学校内で実施する学年指導、各学年に応じたキャリア教育を充実することができた。各学年の就職・進学指導を通して、職業観や進路に対する意識を高めることができた。 キャリアパスポートの作成に取り組む、生徒の体験や活動等の振り返りを行うことができた。また、ホームページにより各行事の様子を配信することができた。	生徒の希望や適性に沿った勤労観・職業観が育成されるよう、各種ガイダンスや学年指導などのキャリア教育を充実させてきたが、実施が難しいケースが出てきた。各学年で実施予定であった行事を、どう計画するかを再考する必要がある。 キャリアパスポートでは、担任の先生の負担が大きいように感じる。学年団の中で割り振り等を考える必要があると思う。
	個に応じた指導の充実	「学びの基礎診断」や各種模試、補習の実施により、生徒の学力向上を目指す。また、ガイダンスを通して進路選択に対して幅広い視野を持たせるとともに、個々の進路希望に応じた面接及び志望理由書等の指導を行う。大学進学を希望する生徒に対して、個別の教科指導の充実を努め進学就職率100%を目指す。 A: 100%以上 B: 99~90% C: 89~80% D: 79~70% E: 69%以下	C	担任を中心として、就職指導(校内就職模試の実施、適性検査の実施、応募書類の作成指導・面接指導等)、進路指導(進学模試の実施、適性検査の実施、小論文指導、志望理由書作成指導、面接指導や受検科目に対する指導等)において、個に応じた指導を行うことができた。	教職員の業務負担増により、個別指導の時間を確保することが難しくなっていることに加え、教科指導、学習指導・面接指導を行う上で特定の先生方への負担が非常に大きい。また、グループディスカッションや小論文等、受験方法が多様化しているため、早期に生徒の特性に合った受験方法の把握や受験に対する意識を高められるような指導が望まれる。
業務改善	適切な勤務時間	週に1回「ノー残業デー」を設け、教職員の時間外労働の時間削減を図るとともに、業務の効率化への意識を高める。	C	「ノー残業デー」の設定を考えたが実施には至らなかった。一部の教職員が遅くまで残る傾向があるので、意識改善に努めた。	仕事が偏りすぎないよう、校務分掌等に配慮する。「ノー残業デー」については、曜日を設定し、職員朝礼時に周知するようにしたい。学年・課等で互いに声を掛け合ったりするなどして徹底を図る。
	職場環境の整備	年休の積極的な取得を呼び掛けたり、上司に相談しやすい雰囲気を作ったりすることにより、教職員の疲労や心理的負担の軽減を図る。	B	年休取得については、考査中などに呼び掛けし、取得しやすい雰囲気は生まれている。各教室にホワイトボードとプロジェクトが設置されたため、Web会議等に参加しやすくなった。業務員室・作法室を教職員が休憩できるよう片付けたりするなど、職場環境の整備に努めた。	今年度の改善は教職員からの提案により実現した。次年度も引き続き、教職員の疲労や心理的負担の軽減につながる職場環境の改善に努め、提案しやすい雰囲気づくりに努める。

※評価は5段階(A:十分な成果があった B:かなりの成果があった C:一応の成果があった D:あまり成果がなかった E:成果がなかった)とする。